
 学 会 記 事

第 66 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 24 年 6 月 16 日 (土)
午後 2 時～
会 場 ANA クラウンプラザホテル新潟
3 階 飛翔の間

I. 一般演題

1 冠動脈 motion artifact が拡張期画質に及ぼす影響について：高時間分解能 DSCT による検討

中村 浩紀・木村 元政*・高橋 和範*
村岡 祐基*・江川奈緒子*・能登 義幸**
吉村 宣彦**

自治医科大学附属さいたま医療センター
中央放射部
新潟大学医学部保健学科*
新潟大学医歯学総合病院放射線部**

【目的】高い時間分解能を有している DSCT 装置を用いて施行した冠動脈 CTA 検査データを用いて、SCCT 区域分類各セグメント別、各枝別の静止心位相、および各枝の本幹・側枝の静止心位相について検討した。

【方法】対象症例は、新潟大学医歯学総合病院にて、2009 年 10 月から 2011 年 10 月までに冠動脈病変評価を目的として、冠動脈 CTA 検査が施行された症例 66 例で、低心拍 (70 未満) 群 41 例、高心拍 (70 以上) 群 25 例である。CT 装置は SOMATOM Definition FLASH で、3D 画像作成およびデータ解析には AquariusWS を用いた。

【結果】

1) LAD 枝では高心拍数群、低心拍数群の間の画質に差がなかったが、セグメント③および⑩、

RCA 枝および LCx 枝においては有意に高心拍群で画質が低下した。

2) LAD 枝、LCx 枝では側枝を含めたものの方で評価が高くなった。

【結語】拡張期心位相で再構成を行う場合は、側枝の影響が少なく、本幹に留意した心位相で良いことが示唆された。

2 死後 CT における大動脈変形；生前 CT との比較

高橋 直也・樋口 健史・木口 貴雄
広瀬 保夫*・山内 春夫**・高塚 尚和**
舟山 一寿**

新潟市民病院放射線診断科
同 救命救急科*
新潟大学法医学教室**

【目的】同一患者で生前と死後の CT を比較し、大動脈の死後の変形を評価する。

【対象と方法】生前・死後に CT を行った 58 例 (胸部 CT44 例、腹部 CT57 例) を対象とした。生前・死後 CT それぞれで、上行大動脈、下行大動脈、腹部大動脈の径を測定し、長径・短径比を算出した。

【結果】すべてのレベルで大動脈は死後に有意に収縮した。下行大動脈と腹部大動脈は有意に扁平化した。

【結論】死後 CT では大動脈はすべてのレベルで収縮し、下行大動脈と腹部大動脈で有意に扁平化した。死後画像診断では大動脈の死後の変形に注意する必要がある。